

「オナニー」記号の系譜

齋 藤 光

SAITOH Hikaru

はじめに

「性対象の助けを受けずに自分で性的興奮とその開放をもたらす性的行為」⁽¹⁾ こうした行為を、現在は、普通「自慰」と呼んでいる。

この自慰行為を表す日本語は、三系列からなり、多数の単語が知られている。自慰がそうであるように、まず、一群の漢語による表現が存在する。現在一般的なものは、三種類、自慰、自洩、手淫である。これら三つの語は同じ意味ではあるが、微妙にニュアンスが異なる。使われている漢字が示す価値づけで、発信するメッセージや、受け手が抱くイメージに差が出てくるからと考えられる。

第二に、古くから日本で自慰を呼び習わしてきた一連の言葉がある。和語による自慰呼称といえよう。特に有名なのは「かわつるみ(皮つるみ)」と「せんずり(千擦り)」であり、この二つを含めて語史的な考察がいくつもなされてきている。⁽²⁾ ただ、この系列の言葉は、現在では日常的にも専門的にもあまり使われず、特に自慰についての学術研究論文でこの用語を採用することはほとんどない。

第三群として、洋語をそのままカタカナ表記にして用いる場合がある。一般的なものはオナニーとマスターベーション。オナニズムやオナニスムも時おり目にする。調査したわけではないが、日常的に、また、専門的に、洋語系のものが、漢語系のものよりも使われる機会が多いかもしれない。もしそうならば、一般的にいうと、現在、性的行為としての自慰行為は、欧米由来の言葉で、呼ばれ、指し示されているということになる。

この論文では、自慰という行為を枠取る記号にまつわる問題を考察する。その記号の起源や意味の揺れなどについての予備的な論考である。自慰を指す言葉は、漢語・和語・洋語系と三つの系列に分かれ、それぞれの系列で個別に多数あるのであるが、ここでは、洋語に由来するカタカナ表記の記号のうち、「オナニー」について論じる予定だ。なぜなら、自慰が、欧米文化圏と、その世界化である近現代文化圏で「問題」⁽³⁾ となったのは、「オナニー」という呼び名が誕生したことと深く関わるからである。

* 本研究の大部分は、2004年度京都精華大学海外研究の制度および資金を基になされた。この制度および資金によるこれ以外の研究の展開も、今後随時発表報告していく予定である。

「オナニー」の系譜

「オナニー」はドイツ語由来と思われる。ドイツ語の Onanie である。いつ日本にはいつきたのか、あるいはいつ日本語を母語とする人が Onanie という語に始めて接したのか、文字通り「オナニー」という語そして表記が日本語文化圏で使われ始めたのはいつなのか（記号としての初出など）、また、いつごろから大衆化し通俗化したのか、いずれも、はっきりしていない。

現在のところ、遅くとも1882年、明治15年には、アルファベット表記ではあるが、日本の学問セクターで使われていたことが分かっている。

この年、日本の裁判医学での草分け片山国嘉は、『裁判医学提綱 前編 巻一』⁽⁴⁾を出版した。彼は、当時欧州で議論構築されていた医学と法の交差域について、この書物の中で整理解説することを試みた。この書物があつかう医 法交差域は、結婚に関わる性の問題から変死体の死因の問題にまでわたる。現在でいうところの精神鑑定も含む。つまり法医学という領域である。

この医 法交差域では、「猥褻の所行」⁽⁵⁾も問題とされた。『裁判医学提綱 前編 巻一』では、「第二篇 生体検査各論」の中の「猥褻姦淫論」と題された章で扱われている。

片山によれば「猥褻の所行」とは「人倫を紊り風俗を害する正当の交媾に非ざる淫事の所行」である。つまり、人間的な倫理秩序を混乱させ、社会的な風俗習慣を破損する、正常の性交でない性的な行為、とでも理解するとよいだろう。

この部分を少しくわしく確認しておこう。まず、正常の性交は、男女による、男性性器の女性性器への挿入とされている。ヘテロセクシュアル（この概念は使用されてはいないが）な性交が正しい性のあり方であり、そこから外れるものは医 法的に誤まったものと認定されている。男女の性器的性交以外の性的行為（淫事）を、そうした観点から「猥褻の所行」とカテゴライズしたのである。

次に、このようにカテゴライズされた「猥褻の所行」の働きが検討される。それによれば、そうした行為は、倫理秩序と社会秩序を混乱させ破壊する、そうした働きを持つとされた。

これを一連の図式にまとめると次のように三段階になる。

- ①正しい性（正当な淫事）として男女の性器性交を認定する。
- ②誤まった性として、上記①以外の淫事をまとめ、「猥褻の所行」とカテゴライズする。
- ③誤まった性、すなわち、「猥褻の所行」に、倫理や社会に対する負の機能を認める。

片山があげている欧米の参考書籍からも明らかであるが、この図式は、当時の欧米の法医学の構えや性把握であった。欧米のこうした法医学の構えや法医学による把握が、明治期の日本

で公的議論として展開されたと認めることができる。

不正な性としての「猥褻の所行」には三つの下位カテゴリーが区別された。

「曰く手淫曰く鶏姦曰く獣姦是なり」⁽⁶⁾

第一は「手淫」。第二は「鶏姦」で、この場合は「男色」をさすのではなく、肛門性交である。第三が「獣姦」で、性的対象、性交の相手が人間以外の禽獣とされる場合である。この「手淫」カテゴリーの中に、Onanie が出てくるのである。

そこを見ておこう。

「〔一〕手淫 手淫 Onanie とは手指を以て陰門に挿入し又陰茎を握りて之を摩擦するの所為を謂ふ之を十二歳に満たさる男女に対し又暴行を以て十二歳以上の男女に対して行ふは法律の禁する所なり

既に数回の交媾を行ひたる婦女に於ては手指を陰門中に挿入し摩擦すと雖も甚しき粗暴を致すに非されは後に之を徴す可きの証跡なしと雖未だ破瓜せさる幼女殊に小児に在りては則然らず手指を陰門中に挿入すれば為に処女膜の破裂する事陰茎を以てするよりも甚た容易にして且つ其破裂孔の広徑たるや大抵比例的に狭小なるを以て之を陰茎の挿入と区別す其他亦外陰部及び膣壁の糜爛、爪傷、出血、強炎等を見る然れとも日常手淫の癖ある者に於ては間々此の如き所行を受くるも毫も其徴候を呈せさる事有り

童男の手淫は少しく陰茎の充血、包皮の弛緩等を来すと雖確徴と看做す可き者なし」⁽⁷⁾

この Onanie の音がカタカナで表記されるとオナニーとなるのであり、それは、漢字で示された手淫と対応する、とされていた。Onanie = オナニー = 手淫というつながりを、ここに認めることができるであろう。

ただこの引用部分を読むと、Onanie = オナニー = 手淫というつながりとは別に、その意味内容の問題が出てくるのが分かる。現在は、「手指を以て（他者の：引用者）陰門に挿入し又（他者の）陰茎を握りて之を摩擦するの所為」を Onanie = オナニー = 手淫とは呼ばない。「性対象の助けを受けずに自分で性的興奮とその開放をもたらす性的行為」がオナニーである。

『裁判医学提綱 前編 卷一』のこの部分は、犯罪行為を扱っているのだが、行為内容だけに着目するならば、「手指を以て（他者の：引用者）陰門に挿入し又（他者の）陰茎を握りて之を摩擦するの所為」は、最近まで、「ペッティング」という行為に入れられていたのではあるまいか。ただ、近頃は「ペッティング」というカテゴリー自体消滅しつつあるが。また、2000

年に出版された『データブック NHK 日本人の性行動』の基準からすると、『裁判医学提綱 前編 巻一』での「手淫」は、「セックス」とされるのではなかろうか。⁽⁸⁾

ただし、同じテキスト内には、「日常手淫の癖ある者」という記述もある。この場合の「手淫」は、自分の手などで性的興奮を得る、という現在の意味とつながる。

とすれば、ここでの Onanie = オナニー = 手淫というつながりを持つ記号は、手 性器という器官の結合・接触に注目しているのであり、性的主体と性的対象の問題は、視野に入っていないということだ。「猥褻の所行」の三つのカテゴリーから考えると、まず性対象が人が獣かに分かれ、人の場合、器官の結合・接触が、性器 性器、手 性器、肛門 性器に類別されていると理解できそうだ。

このように分析できるならば、『裁判医学提綱 前編 巻一』での Onanie = オナニー = 手淫は、性対象が人で、器官の結合としては、手 性器となる形態をさし、性対象と性主体が別であるか同一であるか、というところに分割線を引かない、性行為理解であった、その中での把握であった、とすることが出来る。この問題は、さらにいろいろ考察すべき側面を持っているが、本論考では、ひとまずここで打ち切りとしておこう。

ところで、性的対象と性的主体が同一である性行為を意味する「Onanie = オナニー = 手淫」という記号のあり方に関してはどうであろうか。遅くとも、1921年、大正10年には、「オナニー」がそうした使われ方をしていた。通俗性慾学研究者の一人である澤田順次郎の『性慾の心理』⁽⁹⁾を見ておこう。澤田は、性教育を扱うとした部分で、「自流的遂情」を論じ、以下のように述べている。

「自流的遂情は一に自慰または手淫ともいひ、…普通に謂ふところの自流的遂情は、生殖器を刺激するものなれども、広義に於ける自流的遂情は、…生殖器のみならず、其の他の部分を刺激して、快美感を生ずるものも、これに属するなり。…之れを要するに異性に依ることなく、自遂的に性慾を行ふもの…」⁽¹⁰⁾

つまり、「自流的遂情」「自慰」「手淫」とは、自ら、生殖器や生殖器以外の部分を刺激して快感を得る性行為、と理解している。意味の広い狭いは、刺激を受ける身体部分が、性器か性器以外の部分も含めるかという点だ。中心は、「自分での性行為」というところだろう。さらにこう続く。

「自洩は英語の謂はゆるマスターベーション Masturbation. 即ち Self-abuse. にして、オナニズム Onanism. ともいひ、独逸にてはオナニー Onanie 又は Selbst befleckung. と称す。」⁽¹¹⁾

要するに、「自分での性行為」は、「自流的遂情」というが、ドイツ語では「オナニー Onanie」である、としたわけである。

以上を確認したところで、もう一度オナニー自体に戻る。オナニーは、ドイツ語の Onanie の発音・読みをカタカナで表現したものである。そこで、Onanie 自体の起源はどうなっているのかを、次にざっと見ておこう。

Onanie は遅くとも、1741年までにはドイツ語文化圏に定着していた。少なくとも文化的標準化⁽¹²⁾はしていた。18世紀に出版されたドイツ語文化圏の百科事典『ZEDLER UNIVERSAL LEXICON.』を見ると、その25巻に「ONANIA」(p.1450)、「ONANIE」(p.1450)、そして「ONANITICVM CRIMEN」(p.1450)が項目として並んで採用されている。いずれも「Selbst Befleckung を見よ」と簡単に扱われているに過ぎないが。この巻の出版は1741年だ。ちなみに「Selbst Befleckung」の項目は、翌年刊行された36巻で詳しく扱われた。⁽¹³⁾

「Selbst Befleckung」であるが、文字通り訳すと「自己汚染」となる。定訳は「自洩」であろう。英語のself-pollutionと対応する。つまり、Onanie は、Onania と並び、いずれも同じ意味、自洩である、とされていたわけだ。

ここで重要なのは、「ONANIA」と「ONANIE」が並んでいることだ。このことから次のように推測できる。ドイツ語の Onanie の起源は、Onania である。

Onania という言葉は、英語である。イングランドで18世紀始めに出版されたパンフレット『ONANIA』に起源する。英語 Onania は、現在では自慰という意味で使われることはなく、書物の題として記憶されているにすぎない。ある書物の表題、つまり固有名詞とされているためか、『オックスフォード英語辞典』(第2版、第10巻、p.798)でも項目として採用されていない。

要するに、オナニー(カタカナ表記)は Onanie(ドイツ語)から、Onanie(ドイツ語)は Onania(英語)から、系譜的に派生し、異なる言語文化圏で広がったということであろう。

英語の Onania は、あとで見るように聖書の物語からの造語である。「オナニア」という語をめぐる状況を検討するために、その出現時をさらに詳しく検討しておこう。そのためには、パンフレット『オナニア』にあたらなければならない。

初期『オナニア』の周辺

80年代半ばに復刻されたため研究者が良く使う『オナニア』の第8版(1723年)の扉には、次のような表題と記載がなされている。

「ONANIA; OR, THE HEINOUS SIN OF Self=Pollution, AND All its Frightful Consequences, in both SEXES, Considered, WITH Spiritual and Physical Advice to those, who have already injur'd themselves by this abominable Practice.

And seasonable Admonition to the Youth of the Nation, (of both SEXES) and those whose Tuition they are under, whether Parents, Guardians, Masters, or Mistresses.

The Eighth Edition, Corrected, and Enlarg'd to almost as much again, as particulariz'd at the End of the PREFACE; and are all the ADDITIONS, that will be made to this BOOK, how often soever it may come to be Reprinted.

And ONAN knew that the Seed should not be his: and it came to pass, when he went in unto his Brothers Wife, that he spilled it on the Ground, lest that he should give Seed to his Brother.

And the Thing which he Did, displeas'd the LOAD: wherefore he Slew him also. GEN. 38, ver. 9. 10.

LONDON: Printed by ELIZ. RUMBALL, for THOMAS CROUCH, Bookseller, at the Bell in Pater-Noster-Row, near Cheapside, 1723.

[Price Stitch'd Two Shillings.]⁽¹⁴⁾

表題にあたるどころだけ試訳しておくとなつて次のようになる。

「オナニア、自己汚染〔自洗〕という憎むべき罪、その両性における恐るべき結果が考察されている、また、この忌まわしい行為によって既に自らを傷つけている人々への、精神的な、そして、肉体的な助言を含む。

また、この国の（両性の）若い人々、およびに、彼らとその下で教育・監督されるであろう両親、後見人、主人、女主人への適切な忠告を含む。」

ここから分かるのは、オナニアは、自己汚染（自洗）、つまり、self-pollution（セルフポリューション）である、とされていることだ。オナニアは、セルフポリューションの同意語である。もちろん「憎むべき罪」であるとする評価、価値付けも重要だ。

では、セルフポリューションとは何か。1710年代末か20年代初め、おそらく1718年に刊行された『オナニア』の第4版⁽¹⁵⁾では、次のように説明されている。

「Self-Pollution is that unnatural Practice, by which Persons of either Sex may defile their

own Bodies, without the Assistance of others, whilst yielding to filthy Imaginations, they endeavour to imitate and procure to themselves that Sensation, which God has ordered to attend the carnal Commerce of the two Sexes for the Continuance of our Species.」⁽¹⁶⁾

試訳はこうなるだろうか。

「自己汚染〔自澆〕とは、不・反自然的な習慣（的行為）である。いずれかの性に属する個人が猥褻な想像（力）に屈して他者の関与なしに自らの肉体を汚すものである。（そうすることで）実行者（彼ら）は、神が、われわれ人類の継続に向けて、両性の肉的交易に参与するために秩序付けたその感覚を模倣しよう、あるいは自らにもたらそうと努める。」

もう一つ1728年にイングランドで出版された『サイクロペディア』の初版⁽¹⁷⁾を紐解いてみよう。そこでは、セルフポリューションに対し、次のような説明がなされている。

「Pollution, or *Self*-pollution, is also used for the abusing or defiling of one's own Body, by Means of lascivious Frictions and Titillations, rais'd by Art, to produce an Emission. See EMISSION.」⁽¹⁸⁾

試訳するとこうなるであろうか。

「ポリューション（汚染）、あるいは、セルフポリューション（自己汚染〕という言葉〕は、次のようにも用いられている。つまり、（精液）射出をなすために、文芸によって発揚され、好色な摩擦と攪りを用いて、自分自身の身体を誤用したり汚したりすることである。」

この『サイクロペディア』は、「Onania, and Onanism」という項目を、世界で初めて採用した辞書として有名である。以下のようにある。

「Onania, and Onanism, Terms some late Empirics have framed to denote the Crime of Self-pollution; mentioned in Scripture to have been practised by *Onan*, and punished in him with Death. 'Tis the same with what in other places of Scripture, particularly *Levit. ch.xx.* is call'd *giving of Seed to Moloch*; for which the Punishment allotted is stoning to Death. See POLLUTION.」⁽¹⁹⁾

これも試訳しておこう。

「オナニア、あるいは、オナニズム。これらの言葉は、幾人かの最近の偽医者が、自洗の罪を名指すため考案したものである。聖書では、オナンによって実行され、死をもって罰せられたと述べられている。聖書の他の部分、特にレビ記では同様のものが、モレクに種（精液）を漏らすこと（その子をモレクにささげること（者））と呼ばれ、投石による死が罰と定められている。」⁽²⁰⁾

『オナニア』では、自洗は「不・反自然的行為」とされおり、「他人の関与なしで自らの肉体を汚す」行為と定義されている。「精液射出」という具体的肉体现象には言及がない。その行為の一種の動因として「猥褻な想像力」があげられ、性器的性交に関わる「感覚」の「模倣」と規定している。「神」が登場することからも分るが、宗教的枠組みが強い。

これに対して『サイクロペーディア』では、自洗をより具体的に、宗教的というよりはむしろ生理的医学的に記述している。「精液射出」を伴う「自身の身体の誤用」行為という定義だ。想像力より、ある種のメディアを起因とし、「好色な摩擦や攪り」という身体的手段へも言及がある。

ポルヌーションという概念自体宗教的「汚穢」の問題とつながるものであるが、ここでの説明は、宗教性がなく、実証的・記述的・直裁的であり、むしろ、「オナニア」や「オナニズム」という言葉に宗教性を読み取ろうとしている。

つまり「オナニア」という言葉はその出現時点で、宗教性やキリスト教的な性格を含みながらも、すでに、「性対象の助けを受けずに自分で性的興奮とその開放をもたらす性的行為」という現在の「自慰」理解と同型的であったということが出来る。

『オナニア』や『サイクロペーディア』の解説を、現在の表現、あるいは、今の理解で言い直すならば、自分自身で（あるいはAVの映像といった何かを用いて）性的イメージを喚起しながら、自分の身体によって（あるいはバイブレーターやダッチワイフなどの何らかの道具を用いて）、自身の身体における性的快感を得よう、性的頂点を経験しようという試み、とでもなるだろうか。

現代的な「オナニー理解図式」には、ジェンダーは無い。つまり、男女のどちらかに振り分けられた、どちらかに特有の行為とはされていない。『オナニア』では「いずれかの性に属する個人」の行為とされジェンダーが問題とならないことが明言されている。しかし、『サイクロペーディア』の表現は、Emission という記号があるところからすると、やはりやや男性に焦点が当たっている、この行為はジェンダー差があるとしている、と見てよいかもかもしれない。た

だ、古代ギリシャ以来の、女性も精液を射出するという考え方は18世紀には残っており、比較的強力ですらあったから、単純に決め付けることはできないが。

ようするに、日本語の「オナニー」は、ドイツ語の「Onanie」に由来し、その「Onanie」は英語圏で誕生した「Onania」という語＝観念から誕生した、ということになるだろう。そしてその起源において、いま私たちが自慰を示すところのオナニーと同型の意味であったということが確認できる。

起源である「オナニア」という言葉は、『オナニア』の匿名の著者が戦略的に鑄造し採用したものであった。「序」には以下のような記述がある。

「The Sin of Onan, and God's sudden Vengeance upon it, are so remarkable, that every Body will easily perceive, that from his Name I have deriv'd the running Title of this Little Book; and tho' I treat of this Crime in Relation to Women, as well as Men, whilst the Offence is Self-Pollution in both, I could not think of any other Word which would so well put the Reader in Mind both of the Sin and its Punishment at once as this.」⁽²¹⁾

ここでは、「オナニア」という言葉でセルフポリューション（自洗）を表現しようとした理由が示されている。要するに、この行為を旧約聖書の創世記で語られる人物オナンと結びつけることで、その行為自体の形と、その行為がもたらす悲惨な結果（神の怒りにふれた死）を縮約的に表現できると考えたから、といえるだろう。問題点はオナンは男であるが、この著者が扱うセルフポリューション（自洗）は男女いずれにもあるということ、と著者自身は考えていた、ということも示されている。

「オナニア」という用語の創出は、この言葉がインパクトを持つであろうと著者が考えたからであった。そして、著者のその戦略は見事に成功した。『オナニア』のパンフレットは売れに売れ、版をかさね、パンフレットで語られた、自慰が宗教的罪であり、自慰が医学的にみて心身にひどく有害で死をももたらすという考えは、このパンフレットを基点としてヨーロッパ世界へ、また、ヨーロッパが世界を征服するにしたがい全世界へと広がったのである。その影響力は20世紀の後半にまで発揮されていたし、ある意味では21世紀に入ってからその影響圏から脱してはいない、といえよう。

ではあるが、不思議なことに、『オナニア』のパンフレットの中では、「オナニア」という記号はほとんど用いられない。『オナニア』の著者に、市井の人々から寄せられた手紙の中で、そのパンフレットの表題として論及されるのがせいぜいである。これから行為の名前が生まれるためには、ひとつは「オナニア」という記号のドイツ語圏への流入とドイツ語化、つまり

「オナニー」への変容、もう一つは、英語圏で「オナニズム」という言葉が登場すること、が必要であった。

特に「オナニズム」の登場は、『オナニア』と関連するので、この節の最後として、そこに少し触れておこう。

現在、日本語文化圏で、「オナニー」ほどではないが、類似の「オナニスム」または「オナニズム」という言葉にも時々出会う。前者「オナニスム」は、おそらくフランス語の「onanisme」由来だろう。ドイツ語文化圏の日本の言葉や思想に対する影響を煙たがり、フランス文化の洗練さを示そうとした人々が使い始めた、のかもしれない。

フランス語文化圏では、1760年に出版された『Traité de l'onanisme』に起源すると大体はわかれている。Tissotが前年にラテン語で著した著作をフランス語で出版したものだ。⁽²²⁾しかし、フランス語「onanisme」を英語「onanism」と等価とする、つまり、フランス語「onanisme」の英語化と考えられるかといえば、事情はもう少し複雑だ。

先にも引用した『オナニア』第8版の「序」にはこういう箇所がある。

「I AM not ignorant, that after the THIRD EDITION, of the ONANIA, a virulent Phamphlet has been Publish'd against it, under the Title of ONANISM.」⁽²³⁾

つまり、第3版出版後、そして、第4版出版前に、『オナニア』を非難する「敵意ある」パンフレットが現れた。その表題が「ONANISM」だったというのである。残念ながらこのパンフレットは未見である。であるから、どういう意味で「Onanism」という記号が使われているのか分からない。ただ、アメリカの国立医学図書館のカタログを見ると、「Onanism display'd」というパンフレットの第2版が、ロンドンで出版されたことになっていて、現物が存在している。これが果たして『オナニア』の著者が敵意とあると感じたものであるか、今のところ残念ながら不明である。

ただ前にも引用した『サイクロペーディア』では、項目は「Onania, and Onanism」となっており、「これらの言葉は、幾人かの最近の偽医者が、自瀉の罪を名指すため考案した」とあるから、これらは『オナニア』のパンフレットとそれを非難するパンフレット『オナニズム』に由来する「オナニア」と「オナニズム」であるのではあるまいか。Tissotのフランス語版より前に「オナニズム」という英語が現れ、それが自慰行為を示す記号として使われるようになったと推測できる。『オックスフォード英語辞典』(第2版, 第10巻, p.798)の解釈もそのようになっている。

今後の方向の素描⁽²⁴⁾

さて、『オナニア』のパンフレットを実際に観、また、最近発表された関連文献を読むにしたがい、『オナニア』が、宗教的罪としての自洩、心身に有害な行為としての手淫という観念を広げた起点以上に重要であるのではないかと考えるに至っている。

もちろんその前提としては、このテキストの書誌的な研究や、所蔵等の現状調査が重要である。それらについて、特に後者の所蔵に関しては、ヨーロッパ大陸の図書館とアメリカの図書館の現地調査が必要であるが、現在はその予定を立てることさえできていない。今後を期する、としかここでは、残念ながら言えない。

とはいえ、『オナニア』の位置づけ、意味については、いくつかの方向で、展開できる可能性が見えている。第一は、『オナニア』やそれをめぐる事柄が、いわゆる「公共性」を起源において支えた制度と関係していた、ということだ。『オナニア』第8版に掲載されている、1722年5月1日付の匿名の著者へあてた手紙は、これに関連して、意味深い事柄を示してくれる。

その手紙は「私はセルフポリューション（自洩）によって自らを駄目になっている不幸な若者の一人です」と自己紹介する文章から始まる。彼は16歳からこの行為をはじめたのであるが、その「意味」や「脅威」を理解してはいなかった。あるとき「a Publick House」に行き、そこで「London-Journal」という冊子をたまたま目にした。なんとその「Journal」には、「ONANIA」第6版の広告が掲載されていたのだ。

その広告を目にしたとき、彼は「オナニア」の意味がわからなかった。そこで、いっしょにいた友人に聞いたところ、おそらく自洩であるとの説明があった。友人からの説明に思い当たる所があったので、彼はパンフレットを読み、自身の「惨状」を了解して、手紙を出して相談しようということになったのである。

問題はこの「a Publick House」である。いわゆる「コーヒーハウス」とは異なり、おそらくアルコール類を提供していた場であると思われるが、似た側面も持つ制度ではないかと推察される。「コーヒーハウス」と同じく、当時勃興し始めたジャーナリズムの紙媒体、新聞や雑誌に接することが出来る施設・場であったようだ。ここで、彼は、「広告」というこれまた当時広まり始めたメディアを通して、「オナニア」という記号に出会ったのだ。いっしょに行った友人は「オナニア」の意味を知っていたらしい。その友人ももしかすると「a Publick House」や「コーヒーハウス」でその記号に出会ったのかもしれないし、パンフレット自体がそうしたところにあったのかもしれない。

このことはこういうようにまとめることが可能だろう。「オナニア」という記号と観念は、第一には、パンフレットを通して広がり、『オナニズム』という別のパンフレットの存在から

も明らかであるが、パンフレットを介した議論が構築された、ということである。⁽²⁵⁾つまりある種の公的な議論圏の中で「オナニア」の記号や自慰の観念、あるいは自洗の宗教的罪悪性と心身有害性が扱われていたのである。

第二に、「コーヒーハウス」ではないにしろ、公共を支える類似の制度施設「a Publick House」が、「オナニア」に関わる情報の流通に舞台を提供した可能性が高いということである。

第三に、これは次の「増殖」という問題と関連するが、17世紀後半に整えられた、新しい郵便制度を介した手紙により、議論も含む主に相談が展開された。つまり、公共のネットワークが、匿名著者と「読者」の結びつきを形成し、自慰観念の共同性を形成したらしい、ということだ。

このようにまとめたとき、問題は、こうした『オナニア』や「オナニア」が、公共性、公共圏の性格といかに相関するという点である。これが今後の展開の第一のポイントとなるであろう。

次に、第二点は、「手紙」の問題と関わるのであるが、『オナニア』テキストの増殖性の問題である。『オナニア』第3版を研究したストールベルクの分析⁽²⁶⁾や大英図書館等所蔵の『オナニア』第4版、第8版などを検討すると、このパンフレットの初版は、40ページ前後の薄いものであったと推定される。おそらく「第一章：自洗の憎むべき罪について」「第二章：自洗の恐るべき結果について」「第三章：自洗という厭うべき習慣（的行為）で自らを傷つけた人々に対する魂に関わる、また、身体に関わる助言」の三章と「広告」からなっていたと推測できる。それぞれの章は、せいぜい、15頁、16頁、9頁からなり、「広告」は2頁規模だったのでないかと思われる。

ところが、このパンフレットは大きな反響を呼んだ。売れたのである。さらに読者が手紙を匿名の著者宛に出した。アドバイスを求めたり、診断を求めたのである。匿名の著者は、その手紙を手許においたままにするなどということはない。彼は、その手紙を、パンフレットを補強する素材として、また、症例として、新しい版を出版するごとに追加していったのだ。これは、15版にいたるまで続けられ、『オナニアへの補遺』という別冊を出版するにまで至っている。

また、たとえば第4版の表題をみていただくとわかるが、女性からの手紙がのっていることを知らせることで、好色的な好奇心を刺激しようと試みていることもうかがわれる。

セクシュアリティの歴史を勉強したことがある人は、ここで、1886年に出版された『性的精神病質』の増殖性を思い出すかもしれない。1903年の12版までをとっても、クラフト＝エビングのこの著書は、欧米中からの手紙などを症例として記載することで、急速に頁数や記述内容を増大させた。それと非常に似た現象が、18世紀のはじめにも、性をめぐる一つのテキスト

で、起きていたのだ。このことの意味は一体何か。『オナニア』と『性的精神病質』の増殖性は、隠されたある共通性や、まだ明らかにされていない共通土台の存在を示しているのではあるまいか。これを見つける方向が、今後の展開ポイントの第二のものとなろう。

最後は、医学史と関わる。自洩と淋病の関係である。自洩は、精液を意図的に流出させることである。これに対して、淋病は、病的な、あるいは、腐敗した精液や体液の、生殖器付近からの流出である。精液の流出の正常な形が、男女の性交を通したものであるならば、自洩と淋病は、異常な精液の流出として同じ枠組みの中に含まれることになる。淋病と同じ枠内の自慰は、18世紀の自慰思想理解の一つの要であろう。その方向が、今後の第三のポイントとなるであろう。そして、これは自洩問題の宗教性から医学性への重心移動という問題とも関わるのではないが、そういう予感がする。

関連してやや特殊で、具体的な問題点を一点だけ挙げておく。

「オナニア」という記号や『オナニア』の内容が日本語文化圏と接触する可能性は18世紀以降でてくる。現在のところ『オナニア』的観念は最初、幕末あるいは明治初期に日本語文化圏に入ってきたと考えられている。しかし、オランダ語、あるいは、蘭学を介してそれ以前に移入していたという可能性がないわけではない。

先にあげたストールベルクによれば、1730年にオランダ語訳「オナニア」が出版されている。そこから、「オナニア」的記号や『オナニア』的観念がオランダ語文化圏に入ったとすると、蘭学がそれを日本語文化圏へ仲介した可能性はあるわけだ。この点は、第三のポイントとも関係し、性病についての観念を見ていくことで、もしかすると何か痕跡を発見できるかもしれない。

さいごに

さいごに、今回の簡単な論考、いや、中間報告、いや、一種の素描から、まとめることができる点を並べてゆくと、こうなる。

- 1：日本語「オナニー」はドイツ語「Onanie」に由来する。
- 2：ドイツ語「Onanie」は、英語「onania」に由来し、ドイツ語文化圏では、遅くとも1741年までには文化的標準化を遂げていた。
- 3：英語「onania」の起源はパンフレット『オナニア』である。

ただ、このパンフレットの初版出版については諸説ある。

大英図書館では1710年初版とされているが、所蔵を確認してみたところ初版現物は存在しない。したがって1710年説の証拠はない。

1708年という説もあるが、これも根拠はない。

最近はラカーが *Solitary Sex* (2004) で1712年説を出しているが、これも根拠は薄いように思われる。

ラカー以前ではあるが、ストールベルグは、「オナニア」を詳細に検討し、1716年初版説を提示している。根拠は、1714年から発行された『The Monthly Catalogue』の記載によっており1716年10月出版説だ。ただしこのカタログには「初版」という記載はないという。ではあるが、現時点では、ストールベルグ説が最も説得力がある。

つまり、英語「onania」の起源は1716年、あるいは1710年代である。

- 4：英語「onanism」の起源は、1717年から1718年の間である。（「オナニア」第3版は1717年出版、第4版は18年出版と推測されている。）
- 5：英語「onania」と英語「onanism」は、1728年までの文化的標準化を遂げた。（『サイクロペディア』での両語の採用と説明。近藤和彦はこの事典を、近代的な意志をもつ最初の百科事典、とする。）
- 6：フランス語「onanisme」の起源は遅くとも1760年で、その年に出版された「Traité de l'onanisme」に由来する。
- 7：「Onanie」という記号は、おそくとも、1882年までには、日本語文化圏に入っている。
- 8：自慰を意味する「オナニー」という記号は、おそくとも、1921年までには、日本語文化圏に入っている。

謝 辞

本研究の大部分は、2004年9月から2005年9月までの京都精華大学海外研究、および、グラスゴー大学客員研究員の制度を利用してなされた。海外研究を許可していただいた、杉本理事長（当時）、中尾学長（当時）、梶川学部長（当時）、および、京都精華大学理事会・人文学部教授会のメンバーの皆さんにこの場を借りて心から感謝申し上げたい。また、とりわけ、海外研究の間の授業演習公務負担を肩代わりして下さった、人文学部社会メディア学科教員メンバーの皆さんには、深くお礼申し上げたい。有難うございました。

帰国後の資料収集などは、京都精華大学情報館の職員の皆さんにいろいろお世話になった。本当に有難うございます。

また、「a Publick House」に関しては、イギリス史・アイルランド史研究者である Madame KOSEKI にいろいろご教示いただいた。

文献と註

- (1) 小田晋「自慰」, 加藤正明・保崎秀夫・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾他編『新版 精神医学事典』1993年, 弘文堂, p.274。

小田によるマルクーゼの「自慰」の定義を参考に少し改変して使用している。

なお「オナニー」という用語と関連付けられる聖書の記述も, ここに参考のためあげておく。

「創世記」の第38章, 第9節・第10節である。

「オナンその子の己のものとならざるを知られば兄の妻の所にいりし時兄に子をえせしめざらんために地に洩したり。斯なせし事エホバの目に悪かりければエホバ彼をも死しめたまふ」(『旧新約聖書 文語訳』), 「しかしオナンは, その生まれる子が自分のものとならないのを知っていたので, 兄に子孫を与えないために, 兄嫁のところにはいと, 地に流していた。彼のしたことは主を怒らせたので, 主は彼をも殺した。」(『聖書 新改訳』), 「オナンはその子孫が自分のものとならないのを知っていたので, 兄に子孫を与えないように, 兄嫁のところに入る度に子種を地面に流した。彼のしたことは主の意に反することであったので, 彼もまた殺された。」(『聖書 新共同訳』)

- (2) 大藪訓世 (= 岡田希雄 = 岡田甫)「Onanie 語史攷」『ドルメン』第2巻, 4号, 1933年, pp.148-151。

大藪訓世「Onanie 語史攷二」『ドルメン』第2巻, 5号, 1933年, pp.43-47。

大藪訓世「Onanie 語史追攷」『ドルメン』第2巻, 6号, 1933年, pp.46-49。

大藪訓世「Onanie 語史補攷」『ドルメン』第2巻, 7号, 1933年, pp.48-51。

大藪訓世「Onanie 語史続攷」『ドルメン』第2巻, 11号, 1933年, pp.42-46。

大藪訓世「Onanie 語史続攷中」『ドルメン』第2巻, 12号, 1933年, pp.39-43。

大藪訓世「Onanie 語史続攷下」『ドルメン』第3巻, 1号, 1933年, pp.66-68。

菅谷泰昌「Onanie 語史攷に就いて」『ドルメン』第2巻, 6号, 1933年, p.49。

宗錫夏「Onanie の朝鮮語に就て」『ドルメン』第2巻, 10号, 1933年, pp.25-27。

福島邦道「方言語彙研究に対する語史の一寄与」『國語學』87, 1971年, pp.63-72。

また, 金関丈夫は, 新に「榻のはしがき」を, 自慰の和語系の異称とする考察を以下で行なっている。金関の論文は, 「榻のはしがき」についての考察にとどまらず, 広く和語系の異称に言及している点で非常に重要である。

金関丈夫「榻のはしがき」, 大林太良編, 金関丈夫『新編 木馬と石牛』1996年, 岩波文庫, pp.216-252。

- (3) 自慰の歴史を考える時, 日本語で読める文献は, かなりある。いくつか関連書籍をあげておく。

木本至『オナニーと日本人』1976年, インタナル出版。

金塚貞文『オナニズムの秩序』1982年, みすず書房。

金塚貞文『オナニズムの仕掛け』1987年, 青弓社。

ディディエ=ジャック・デュシェ著, 金塚貞文訳『オナニズムの歴史』1996年, 白水社。

赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』1999年，勁草書房。

ジャン・スタンジェ，アンヌ・ファン・ネック著，稲松三千野訳『自慰』2001年，原書房。

石川弘義『マスターベーションの歴史』2001年，作品社。

- (4) 片山国嘉著『裁判医学提綱(前編・後編)』1888年(明治21年)，島村利助。

引用等は，上記のものによっている。資料は，国立国会図書館が，ネット上に公開している「近代デジタルライブラリー」を使用した。ただし，『裁判医学提綱 前編 巻一』は，東京大学が所蔵するものを複写し，利用した。東大のものと国立国会図書館のものにはテキスト上の差異はみつかっていない。東大のものの書誌的情報は以下の通りである。

片山国嘉『裁判医学提綱 前編 巻一』1882年(明治15年12月8日著作権免許，同年同月出版)，秋南書院蔵版。

なお引用に際し，原文のカタカナ表記はひらがなに改めてある。また旧漢字の一部も改めた。

- (5) 同上，pp.52-53。

「鶏姦」が「Paederastie」，「獣姦」が「Sodomie」とされているのも，これらの性的カテゴリーをどう呼びどう把握するかという問題では重要である。しかし，その点についての全面的考察は，別の機会にゆずりたい。

- (6) 同上，p.52。

- (7) 同上，pp.52-53。

- (8) NHK「日本人の性」プロジェクト編『データブック NHK 日本人の性行動』2002年，NHK 出版。

調査票には次のように書かれている。「ここでいう「セックス」とは，必ずしも性器挿入(膣性交，肛門性交)にかぎりません。性器への接触があり，性的快感があれば，「セックス」と考えてください。ただし，「キスをする」や「抱き合う」など性器への接触をとまなわれない行為や，「マスターベーション(オナニー・自慰)」はふくめないでください。」(p.196)

- (9) 澤田順次郎『性慾の心理』1921年，林書店。

- (10) 同上，p.399。

- (11) 同上。

- (12) 文化的標準化については以下の論文を参照のこと。

斎藤光「「性欲」の文化的標準化」『京都精華大学研究紀要』第6号，1994年，pp.161-176，287。

- (13) ZEDLER UNIVERSAL LEXICON. (第25巻，1741年)，(第36巻，1742年)

なおドイツ語訳は，未見であるが，カタログなどによると，1736年に出版されている。表題は『Onania』となっている。これもカタログからの情報に過ぎないが，ティソーの自慰についての著作も，ドイツ語文化圏では『Onania』という表題で出版されていた可能性がある。

- (14) ONANIA; OR, THE HEINOUS SIN OF Self=Pollution, AND All its Frightful Consequences, in both

SEXES, ... LONDON, 1723.

大英図書館のオンライン目録では、「Onania... The eighth edition, corrected and enlarged, etc. (pp. xi. 197.) (Thomas Crouch: London) (1723).」と記載されている。

以下、オナニア第8版、と表記する。

- (15) Onania: or, the Heinous sin of self-pollution, and all its frightful consequences, in both sexes, considered. ... The fourth edition. ... London, 1718 (?)

大英図書館のオンライン目録では、「Onania: or, the Heinous sin of self-pollution, and all its frightful consequences, in both sexes, considered. With spiritual and physical advice... To which is subjoin'd, a letter from a lady to the author, very curious, concerning the use and abuse of the marriage-bed, with the author's answer... The fourth edition. (pp. iv. 88.) (Printed for the Author: London) [1725?].」と記載されている。

以下、オナニア第4版、と表記する。

- (16) オナニア第4版：同上。

- (17) E. Chambers, F. R. S., *Cyclopaedia: or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences; Containing the Definitions of the Terms, and Accounts of the Things Signify'd Thereby, in the Several Arts, Both Liberal and Mechanical, and the Several Sciences, Human and Divine: The Figures, Kinds, Properties, Productions, Preparations, and Uses of Things Natural and Artificial; The Rise, Progress, and State of Things Ecclesiastical, Civil, Military, and Commercial: with the Several Systems, Sects, Opinions, etc. among Philosophers, Divines, Mathematicians, Physicians, Antiquaries, Criticks, etc.* (第1巻1728, 第2巻1728), (London) (全2巻) (初版)

以下、サイクロペーディア初版、と表記する。

- (18) サイクロペーディア初版：同上。

- (19) サイクロペーディア初版：同上。

- (20) 「レビ記」の部分は、「レビ記」の第20章である。ここでの seed は、古い英語では子孫を指し、第2節「その子をモロクに獻ぐる者は必ず誅さるべし」(『旧新約聖書 文語訳』)、「自分の子供をモレクに与える者は、だれでも必ず殺さなければならない」(『聖書 新改訳』)、「自分の子供をモレク神にささげる者は、必ず死刑に処せられる」(『聖書 新共同訳』)とされる。ここでは、文脈上、seed は種・精液とされるのではなからうか。

- (21) オナニア第4版。

- (22) ディディエ=ジャック・デュシェ、前掲書。

- (23) オナニア第8版。

- (24) 実は以前に、性の歴史を考えるときの3つのポイントをあげたことがある。その時は『オナニア』

の出現についてはほぼ無視していた。しかし、その後の勉強、資料調査、研究で、この『オナニア』の出現を、近代のセクシュアリティ展開の重要な出来事として捉え返す必要がある、という風に考えるようになってきている。資料的には、2004年9月から2005年9月まで、スコットランドを中心とした調査で輪郭がつかめているが、概念的理論的には、まだ、明確な像が結んでいない。ただ、この節で素描するような方向が重要であるということはある程度把握できてきている。この節では、素描を形にすることで、より明確な図式化へ向けたの半歩としたい。

(25) 例えば、以下のパンフレット。

PHILO-CASTITATIS, *ONANIA Examined, and Detected*. LONDON, ... 1723.

(26) Michael Stolberg, Self-pollution, Moral Reform, and the Venereal Trade: Notes on the Sources and Historical Context of *Onania* (1716). *Journal of the History of Sexuality*, Vol.9, No.1-2, January/April 2000, pp.37-61.